

動物巷談

畑正實



ムツゴロウの動物巷談

定価 五〇〇円

昭和四十八年六月三十日第一刷

著 者 畑 正 憲

発行者 榎 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3
電話 東京(六五)一二二一番
郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一落丁・乱丁がありましたらお取替えします

© Masanori Hata 1973

Printed in Japan

0095-332660-7384

目次

ウシガエル	7
おなら	11
シロアリ	14
九・九メートル	18
仲間	22
日光浴	26
さかご	30
捨て子	34
躁ウツ病	38
名投手	42
サルの恋	46
タイラギ	50
ヤドカリ	54
タヌキの……	58
続おなら	62
ネズミ	66

忘れもの	70
しし	74
突起	77
タコ	81
電気クラゲ	84
母親	88
うるか	91
陸釣り	94
サメ	98
タカラガイ	101
赤痢	104
化身	108
ペット	111
夜の海底	115
ヒグマ	119
ガザメ	123

学者	181	アマアカネ	177	妖怪	173	交尾	169	守り神	165	ハブ	162	悪友	158	タロ	155	イモリ	151	女性上位	148	死	145	育ての親	142	ゴーゴー	138	イセエビ	134	夏眠	130	ナマケモノ	126
----	-----	-------	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	------	-----	---	-----	------	-----	------	-----	------	-----	----	-----	-------	-----

長い長い顔の歴史	248	虫屋がなばれ	243	人魚	238	釣り上げられた話	234	ヒグマと酒	230	動物の潜水	226	続魚と水泳	222	魚と水泳	218	達人を追って	214	動物と水泳	210	ボインの科学	206	人と犬	202	ネズミの墓	198	ノミの夫婦	194	おしゃぶり	190	九州行	184
----------	-----	--------	-----	----	-----	----------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	--------	-----	-------	-----	--------	-----	-----	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-----	-----

装
幀
本文イラスト
長
新
畑
正
憲
太

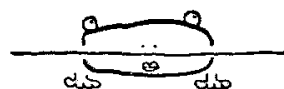
ムツゴロウの動物巷談

ウシガエル

カエルの声がにぎやかな季節になった。夜道を歩きながら、そのなき声で種類を当てるのは楽しいものだ。だがこれは、自分で飼ってみたいとなかなかわからない。親指の先ほどの小さなアオガエルが、けっこう大きな声でないいたりする。

だれにでもわかるのがウシガエル、つまり食用蛙である。名前のとおり、水の中で牛がないているような大声をあげる。

これはアメリカから輸入され、農家の副業として飼育を奨励されたものだが、かなり以前には僕の郷里日田市でも手がけた人がいたらしい。父や祖父から、



よくその声のすさまじさを聞かされたものだ。

しかし、僕がもの心ついたころには絶滅し、日田ではなき声を聞いたことはなかった。

つい五年前のことだ。僕はウシガエルの習性を調べる必要に迫られ、千葉へ採集に行った。飼っているものが逃げだして野生化したものがワンサという場所を、その道のベテランから教えてもらったからである。

いた、いた。ガマよりひとまわりでっかい奴がごろごろしていた。僕はニコして、どっさり採集してリュックにつめた。

そこまでは良かった。持ち帰ってカエルをきれいに洗い、ありとあらゆる容器にわけてしごくご満悦であった。

ところが、好事魔多し、夜に入ってウシガエルたちがいっせいになきだしたのである。

ぶおおん、ぶおおん――。

聞きしにまさる怪しげな大声である。数十匹が合唱をはじめると、床や障子がビリビリとふるえた。

そのころ僕は、アパートに住んでいたからたまらない。たちまち苦情が殺到した。

「アパートで猛獣を飼うとは怪しきりからん。赤ん坊がひきつけを起こすではないか」

「あの……その……実はカエルなんです」

「ますますいかん。カエルごときに安眠を妨害されてたまるものか」

「はっ、以後気をつけます」

そうはいったものの、実験を続けたい。だが、カエルというしろ物は、一匹がなくとそれが信号になって、他のものがわめきだす。合唱を楽しむ動物である。といって、夜だけサルぐつわをかませるわけにもいかない。

窮余の一策。僕は棒切れを用意して、なく気配を見せたカエルをひっぱたくことに決めて、夜どおし妻と交代で見張りをした。

ぶお……コツン。

ぶお……コツン。

てな要領である。こちらが眠くなると、

「おい、交代だ。そら、タッチ」

「はい……。ムニャムニャ……。あと五分。ねえ、お願い」

と、プロレスのタッグマッチさながらであった。これが十日も続くと、こちらもバテたが、ウシガエルもまいってしまった。とんと餌を食べなくなり、死ぬものもあった。それからというもの、僕はカエルもノイローゼになると信じているが、まだだれも賛成してくれない。

おなら



読者の中にはたまに意地の悪い人がいて、犬がおならをすると書いたら、「絶対にウソだ。わしは二十頭飼っとるが一度も聞いたことがありませんぞ」と、抗議の電話をかけてきた。

これには困った。相手が閑人で僕とつきあってくれるならともかく、そう簡単に証明できるものではない。黙っていると、

「お宅の犬は、腸の病気にかったヨレヨレの駄犬だろう」

とたたみかけてきた。

愛犬をけなされるのは腹が立つものだ。僕は言葉荒く、おならを録音するこ

とを約束してしまった。

僕の家の裏庭には大きな犬舎があり、秋田犬と洋犬を飼っている。どちらもメスだから、僕はお産の際には毛布を持ちこんで犬舎の中で眠る。犬の親と子がどんなきずなで結ばれているのか、分析を続けているからだ。

一週間とか十日という単位で、僕は犬の横に寝そべっている。だから、いくつもおならを聞いているのだ。しかし犬は、そうそうふんだんにおならを落としたりしない。せいぜい一日に一回である。

その上、犬は身がまえておならをしない。ごくありふれた顔つきをして、プーッとやるのである。そのあと、自分がたてた音に驚いてあたりを見まわし、やがて震源地に気づいて体を曲げてお尻をクンクン嗅ぐ。人間のように、出す前に微妙な表情をしないので、録音は至難であった。

おならは空気を主体としたガスである。食べものと一緒に呑みこんだ空気を、だれでも、おなら百発分ぐらい胃腸の中に持っている。が、そのほとんどは腸の壁から吸収され、口から吐き出されている。よく、

「派手な音がするのは罪が軽い。タチが悪いのは音無しのかまえた」

といわれるが、これは科学的にもまったく正しい。放屁評論家によると、陽気な音を連発する放屁家のものは、腸の運動が活発で、吸収される間がなく空気が放出されているという。音がしないものは、無臭の成分がまず肺へまわり、吸収されにくい悪臭を放つ成分が濃縮されて忍び出たものである。だから、読み人知らずのおならのほうがずんとタチが悪いわけだ。

——そして五日たった早朝、僕はおならの録音に成功したのである。テープを何度もまわしてみると、明瞭なかわいい音がとらえられている。

ブッ、ウウウ！

おまけつきの、どこから聞いても恥ずかしくない立派なおならである。さっそく僕は、控えておいた電話番号をまわして、その音を聞かせてやった。ところが相手は、

「なんだ、それ、あなたのものじゃないか」

と、電話を切ってしまった。

なるほど、そういわれてみると、僕のものにそっくりであった。犬はおならまで、飼主に似るのだろうか。

シロアリ



娘と家の中を行進しながら、僕は絶えず励ましていた。

「がんばれよ。しっかりやれよ」

「ウン。なんとかね、ウン」

この、ウンと答えるあたりが、さすがにわが子である。尾籠^{びろう}な話で恐縮だが、僕たちはまさにウンを待っていたのである。

三日前、娘は学校から小さな容器を持って帰ってきた。三日の期限つきで、検使用の黄色い物体を採集しろというのである。が、なんたることぞ、娘は親に似てうっかり者だから、採集を忘れて放出してしまったのである。しかも提